

百人町教会

集会案内

礼拝：毎週日曜 午前10時半
 於 東京家政専門学校 2階
 聖書研究会：第1・3水曜 午後7時
 於 石原宅
 連絡先：〒162-0066 東京都新宿区
 市谷台町14-1-701 賈晶淳 方
 TEL/FAX 03-3351-0807
<http://www.hyakunincho-church.com>
 郵便振替口座：00180-8-565379



ろば



私の目線（七八）

「家」と向き合う

廣澤 満之

先日、ある方のお通夜の司式をした（私は僧侶です）。亡くなられた方には、妻と子どもが三人いらっしやる。喪主は、四十代の長男であり、お通夜が始まる前に私が待機する部屋にいらっしやる。私は、いつもこの時間を大切にしている。遺された方が、どのように故人と向き合い、今、ここにあるのか。その想いを背中に負いながら仏様に祈るためには必要な時間だからだ。長男の方は、しきりに、これまで家のお墓に想いを馳せていなかったこと、父親が亡くなったことを機に守るといふ自覚を新たに感じたということをお口にされた。そして、隣にはそれを聞いて安心する母親の姿があった。

現代のお寺は、依然として「家」によって維持されている。江戸時代に完成した檀家制度は、住民管理の一面がある。それぞれの家は必ずどこかのお寺の檀家として所属する。近年、信仰が違うので「家」のお墓を守れない、自分は「嫁」に行った立場なのでお墓を守れないといったことが多くなっている。家族の多様化に対して家制度を基盤としたお寺が対応できていない現状がある。私は、加えて、戦後の民主主義教育や資本主義の中で個人の自由が尊重される考えが生まれたことも影響していると考えている。

先の長男の方には、自分が生かされている

のは先祖となった父の御蔭であり、お墓はその想いを感じる場であるという、至って仏教的ではなく日本文化的なお話をさせていた。本来は、川に遺体を流して生への執着から解放されるのが仏教であり、お墓の中に居るとか、お盆に毎年先祖が戻ってくるなどといったことは非仏教的である。そんなことを語る私は典型的な日本仏教の僧侶である。現在、選択的夫婦別姓制度を求める裁判が複数起きています。事実婚を続ける私にとっては、重要な裁判だ。夫婦別姓を選ぶと様々な不利益があることは、「信条」に対する差別であり（憲法十四条違反）、九六%の女性が結婚時に姓を変更していること自体が姓の選択を自由にできておらず、「個人の尊厳」「両性の本質的平等」が侵害されている状況（憲法二四条違反）であるとして国が訴えられている。まさに家制度の否定であるが、これを私は支持している。この裁判は選択的夫婦別姓制度の是非にとどまらず、社会が多様な考え方を包み込むことができるかどうかという試金石になると考えているからだ。

家制度に立脚したお寺の中で生きている自分を顧みると、僧侶の衣を着た「私」と衣を脱いだ「私」は矛盾していないのだろうか。考える。先日、過去帳（亡くなった方の名前を記した冊子）を見ている横で高島（パートナー）に「家制度だね」とぼそつと言われて、そんなことを考えた。果たして矛盾しているのか、そうではないのか。

ダンからベエル・シェバまで

サムエル記上三一・一〜一三

賈 晶淳

休暇を得て八月一日から三〇日までスイスとイスラエルを旅した。両方とも初めての訪問地であり、初めはイスラエルだけの旅を予定していた。しかし、航空券購入の時に日本からの直行便がないことが分かり、幾つかの航空会社の中からスイス経由の便を選び、スイスで九泊、イスラエルで二〇泊をすることにした。スイスでは二日間をアルプスのユングフラウとマッターホルンの観光に費やし、残りの日程はツヴィングリヤやカルヴァンなどの宗教改革者と関係があるチューリッヒやジュネーブ、バーゼルを訪ねた。ジュネーブではカルヴァンが二六年間説教者として勤めたといわれているサン・ピエル教会の日曜礼拝に参加でき一番の目的がかなえられた。カルヴァンも上ったという高い説教壇で今の牧師が説教する風景はまるで中世に戻ったような錯覚を起こさせるものであった。

というわけで以下の文章では主にイスラエルの旅について記すことにしたい。

まず、イスラエルを第一目的地としたのは、聖地巡礼というより、パイプルの世界をよりリアルに理解するため、当時の人々が生きていた生活の場を訪ね、その空気、気候、土地、水、食べ物などを少しでも身体で体験したいという一念での決定であった。勿論現在のパレスチナの問題は大きなテーマになっている

が、一人旅をする人間にとつては多くの制限があるためテーマにはしなかった。時間は限られ、訪ねてみたいところも多かったが、自分の足に頼っているため常に取捨選択しなければならぬ旅でもあった。何カ所かの拠点を決め往復する形で、長距離の場合は一般交通手段を利用し、短距離の場合はできるだけ歩くことにした。結果的には縦長のイスラエルとヨルダン川の西岸地区のほんの一部のところを平均して一日一〇kmほど歩き回る旅であった。温度・湿度計は危険度を知らせるブザー音がなるため、常に切った状態で使い、汗が多く出たため二本あるアルミボトルの水は宿へ戻るときには常に空っぽであった。

現在の町の姿や野原の風景は古代世界とは想像もできないほど変わっているだろう。町は郊外へ大きく拡がり、野原は緑が限りなく続いている。しかし、ネゲヴ砂漠に広がるライムストーン（石灰岩）の風景と砂漠のような環境は、死海の畔でもエルサレムからエリコへ降りて行くところの風景でも、古代から原野のまま今へ続いている。海面下二〇〇mから四〇〇mに位置するガリラヤ湖や死海、その間を結ぶヨルダン渓谷は温・湿度も高く（死海の畔の昼間の気温は四〇℃を越えていた）長時間歩くことを拒んでいる。

しかし、真夏のこのような自然環境の中でも緑は砂漠でも所々見えていて、テル・アビブの辺りからレバノン国境へ至る広い範囲の沿岸平野と地中海に面しているハイファから



死海を見下ろすマサダ要塞にて

ヨルダン川へ至るところに横たわっているイズレエル谷（平野）ではどこも緑豊かであった。しかし、その緑の根元をよく観察するとどこも細いプラスチック製のパイプが張り巡らされていて、朝夕にパイプの無数の穴から水がこぼれ出る仕組みになっていて、それがない所ではスプリングラーが回っていた。要するに岩だらけで雨が降らない環境では自然農法では無理であるためそのような装置を使い強制農法をするしかないことである。その過酷な環境の中でもイスラエルは優秀な農産物輸出国家として知られている。確かにどの店でも野菜や果物が豊富で量り売りをしてい

た。以下では今回の旅を日付順で紹介したい。初めはやはり空港から近く、バイブルと深い関連があるエルサレムを訪ねた。人・町・交通システム・食・気候・風景など全てが初めて経験するものばかり。エルサレムからはバスで死海の畔のマサダ要塞、クムラン、ヨルダン川西岸地区にあるベツレヘムとエリコを訪ねた。そして、初めて経験する安息日には驚いた。全ての交通手段が運行を中止するため長距離移動が不可能となり、店や食堂も全て閉じてしまうので食料を金曜日の午後早いうちに購入しておかなければならなかった。シナゴークでの礼拝も初めて参加した。写真で見たことのあるエルサレムとベツレヘム（パレスチナ）の間を遮る高いコンクリートの壁が山の方へ長く伸びているのを見、その壁の向こう側である西岸地区への移動の時はとても簡単に通れるが、反対側のエルサレムへの移動は複数の検問を受けなければならず、朝夕の通勤時には長蛇の列になるため長時間も待つこともあると聞いた。

次はバスでベエル・シェバまで行き、他のバスに乗り換え、ネゲヴ砂漠の中央にある小さい町ミツペー・ラモンへ行くことにした。降りるところはこの街の幾つもあるバス停の一つで、間違えると次のバスが来るまで待つか、真昼の砂漠の町を歩かなければならない。しかも車内電光案内板はヘブライ語とアラビア語しかない。結局頼れるのは自分の目で窓の外と地図を必死で確認するしかない。その



ラモン・クレーターのアイベックスと朝霧

次はネゲヴ砂漠の入り口にあるベエル・シェバへ移動し、そこは古代アブラハムとイサクとヤコブが住んでいた町で、町から離れた場所にテル・シェバという世界遺産に登録さ

れた。以下では今回の旅を日付順で紹介したい。初めはやはり空港から近く、バイブルと深い関連があるエルサレムを訪ねた。人・町・交通システム・食・気候・風景など全てが初めて経験するものばかり。エルサレムからはバスで死海の畔のマサダ要塞、クムラン、ヨルダン川西岸地区にあるベツレヘムとエリコを訪ねた。そして、初めて経験する安息日には驚いた。全ての交通手段が運行を中止するため長距離移動が不可能となり、店や食堂も全て閉じてしまうので食料を金曜日の午後早いうちに購入しておかなければならなかった。シナゴークでの礼拝も初めて参加した。写真で見たことのあるエルサレムとベツレヘム（パレスチナ）の間を遮る高いコンクリートの壁が山の方へ長く伸びているのを見、その壁の向こう側である西岸地区への移動の時はとても簡単に通れるが、反対側のエルサレムへの移動は複数の検問を受けなければならず、朝夕の通勤時には長蛇の列になるため長時間も待つこともあると聞いた。

関門をうまく済ませた時には旅への自信が得られた。町の南側には浸食によってできた巨大なラモン・クレーターがある。砂漠の厳しい環境を経験するには最もふさわしい場所であった。旅の幸運にも恵まれ、夏にはほぼ不可能に近く、冬にもまれにしか見られないといわれている不思議な自然現象、朝日が昇る時に砂漠で発生した霧がクレーターへ流れ落ちる素晴らしい光景に出会った。

れている国立公園があり、アブラハム当時の遺跡を観ることができた。ベエル・シェバには鉄道の南側の始発駅があり、そこから次の拠点へ移る時には初めて列車に乗って北のハイファまで行き、バスに乗り換えてイエスの生まれ育ったナザレへ移動した。ナザレの町は大きい町でその中心部と周辺にはイエスを記念する多くの教会や修道院が散在していた。ホテルの前にある「受胎告知教会」を見学後、ナザレ山の一番高いところにある「青年イエスの教会」まで登り、ナザレの全景と遠くに見えるイズレエル平野を眺めることができた。町の一角にある「ナザレ村」にはイエス時代の生活環境を再現し、実物の羊やるば、当時の服装をした人などがいて、レクチャーしてくれる有意義な施設があった。

ナザレからは山を下り、イズレエル平野一帯に点在している旧約聖書との関連場所を訪ねてみることにした。先ず平野中央の南側にあるテル・メギッド国立公園を訪ねた。メギッドは上記のテル・シェバと現在も発掘が続いている北ガリラヤのテル・ハツオルと三カ所がセットで世界遺産に登録されている古代町の一つである。「テル」とは高い場所を意味するが、祭儀のための高台があり、防御のための戦略的な場所でもある。メギッドの前方に広がるイズレエル平野は地中海からヨルダン川まで横切る形になっていてメソポタミアとエジプトを結ぶ国際交易路になっていた。その平野部には肥沃な土壌が広がっていた

め、この場所を巡っての戦争が絶えず起き、遺跡には馬小屋の跡が残っていて戦車隊があったことを知らせてくれる(列王記下八・四)。そしてヨシヤ王がエジプトの王ネコに殺された場所でもある(列王記下三二・一九)。テル・メギッドとシエバでは地下水路が発見され、訪問者は見学が可能になっている。この他に戦略的な目的で造られた地下水路で有名なのは、エルサレムのダビデの町にBC七百年頃のヒゼキヤ王の時代に造られた長さ五三三mのトンネルである。現在でもトンネルの中を水が流れていて、見学者はそこを歩いて通れるようになっていて。

そして、このイズレエル平野の北側にはナザレの山で始まるガリラヤの山地が広がり、南側にはサムエル記上の三一章に記されているイスラエル軍とペリシテ軍との戦闘でサウル王やその一族が最期を迎えたギルボア山があり、そこからサムリア山地が始まっている。そして、このギルボア山の裾野が広がる麓とヨルダン川の間にあるベト・シエアン国立公園はサウル王の遺体をさらしたといわれる場所で、ローマ時代に造られた列柱や劇場、大浴場などの跡が今でも多く残っている。

次に訪ねたところはガリラヤ湖畔で一番大きい町のティベリヤである。ナザレからティベリヤまでは約三〇kmの距離で、幾つかの山を越えなければならず夏場に徒歩で往き来するには厳しい環境である。ガリラヤ湖の周辺もほぼ山地であるためイエスを求めてエルサ

レムやシドン(地中海沿岸)から多くの人が集まったというのは結構大変な事であったと思われる。ここからはガリラヤ湖の南側で始まるヨルダン川と、最も北側のレバノンとの国境近くにあるテル・ダン国立公園を訪ねることができた。ダンにはサムエルやダビデ王の時代からベエル・シエバと合わせて北から南までを、即ち古代イスラエルの全地(サムエル記上三二・二〇)を象徴的に表す言葉である。



テル・メギッドから見下ろすイズレエル平野

テル・ダン国立公園はバス停があるキブツ・ダンから公園の入口までは一kmの距離があり、暑い昼間に往復四kmを歩かなければならずその上、一日五本しかないバスを待つのも大変

だった。公園の北側にテル・ダンの遺跡があり、イスラエル王国が南北に分裂した時に北イスラエルのヤロブアム王がエルサレム神殿の代わりに造ったとする祭壇(列王記上二二・二八、二九)が残っていた。そばには幾つかの湧き水の場所があり、その水は公園内で水量の豊富なダン川となり、やがてヘルモン山を水源とするヨルダン川と合流し、ガリラヤ湖へ流れていく。鬱蒼とした森が南側に広がり、多くの子連れの家族が水遊びをしていた。

次の場所のハイファはアハブ王時代にエリヤとバアルの預言者が戦ったといわれているカルメル山の麓で、山の嶺が終わりその先が地中海へ落ちて行く頂上にエリヤが留まっていたといわれている洞窟と共に、カルメル修道会の本部がある。またその山の麓には戦いを終えたエリヤがアハブ王の脅威から逃れ隠れていたといわれている洞窟もある(列王記上一八)。ハイファでは南側へバスで一時間程のところのパウロがローマへ向かって船出したカイザリアの遺跡を観に行った。次の日は単なる観光を目的に地中海沿いの一番北側のレバノンとの国境にあるローシユ・ハ・ニクラという岬へ行き、波の浸食による洞穴と中まで入ってくる海の景色や響く波の音が壮観であった。最後の日は空港近くのテル・アビブに泊まり、地中海へ沈む夕日を眺めることで旅を終えた。旅の間に健康や安全が守られたこと、多くの経験が得られたことを神に感謝する。(二〇一八年九月二日証詞より)

木田献一先生との出会い

穂積 夏子

一九七二年の冬休み、東京YMCAと早稲田奉仕園主催の「足で体験する東南アジアセミナー・三週間の旅」に参加したことが、私が東南アジアとかかわるようになったきっかけです。

十歳の時から人の手が入っていない自然のままの土地に住みたいと憧れ、東南アジアへ行きたいと願っていましたので、このプログラムに飛びつきました。大久保集会（今の百人町教会）の会員だった今村加奈子さんも参加しており、親しくなると、タイ国へ行く準備のために上京した折には、加奈子さんと共に大久保集会に出席しました。この旅行でタイ国を訪問し、望月賢一郎先生ご夫妻のお世話になりました。先生ご夫妻へ、ボランティアで働けるようにお願いし、その後マコーミック病院で二年間奉仕しました。

私は弘前南教会で育ち、教会では戦争責任について話し合っていました。ベトナム戦争に教会を挙げて反対し、アジアの平和を祈っていました。アジアの人々との共生を考え、青年会を中心に「アジアの会」をつくり毎年講師を招き、教区の他教会の人々も誘って集会を開いたり、マコーミック病院とタイの神学校へ献金を送ったりする活動は五、六年続きました。統一教会・原理運動関係者が二人入って来て攻撃され、教会は分裂しました。タイ国から帰国した後も東南アジアのどこ

かへ行きたいと考え、国際交流基金の日本語教育研修会の研修を受けるため一年間東京に滞在しました。八ヶ月間は信朋塾の塾生となり、管理人の小池常隆・佐枝子さんご夫妻や他の塾生と共に塾長の伊藤虎丸先生の聖書研究会や佐枝子さんの準備された食事会に参加し、楽しい時を過ごしました。その間は勿論大久保集会の礼拝へ出席していました。

ある礼拝の証詞者がそれまでお会いしたところのない先生でした。聖書の歴史的背景が広く深く、人物像もその場の情景が目映るかのように、よく理解できるようにお話してくださり、衝撃を受け、強く感動しました。その時、「神は、最も弱き者、貧しき者の側におられ、弾圧、抑圧される者を解放される。イエスはそのような人々のところに足を運ばれた」と学びました。「これがキリスト教か」という思いを強くしたのを覚えています。その先生が、ドイツから帰国されたばかりの有名な神学者の木田献一先生とは存じ上げず（そう言えば紹介されていました）礼拝後、「先生、素晴らしいお話でした。聖書の世界をこんなに具体的に生き生きと感じたのは初めてです」と挨拶したのを記憶しています。

一九八四年フィリピンのミンダナオ島のビショップオフィスの教育部で働くことになった時、ビショップに「信徒宣教師で来るように」と言われました。でも、私の所属している弘前南教会の牧師は、私がフィリピンへ行くことに強く反対しました。この件を木田先

生にご相談しましたら「捨てられた者、行くところのない者、すべての人々に百人町教会の門は開いている」とおっしゃり、それから私は百人町教会の会員になりました。

木田先生は私の支援の会会長と事務局を引き受け、一九九三年から七年間担当して下さいました。そして、木田みな子夫人も熱心に支援して下さい、ご家族全員から応援していただき、とても感謝致しております。

ミンダナオ島では、森林伐採に反対し国軍から激しい弾圧を受け、命を失い、住む土地も奪われ、街の生活にも適応しない彷徨する少数民族に会いました。少数民族の人々は人間性が豊かで、優しく、寛容で人間としての尊厳をずつしりと感じられる、しかも、真理と言うか、真実を見抜く力がありました。イエスはこの様な人々に心を動かされたのかしらと思いました。

「どのような境遇に暮らしても、人間は全て同じ価値がある」という木田先生のメッセージが伝わってきました。



少教民族の
ネックレス

百人町教会五〇年に寄せて

信朋塾と私

小池佐枝子（談）

一九四七年東京の世田谷上馬に生まれました。三人姉妹の真ん中で会社員の父、専業主婦の母に大切に育てられました。中学校は女子学院。入学してすぐに先生の勧めで美竹教会に通い始めました。中学生礼拝は男子の方が多かったです。中三の時父に「受洗するよ」と言うのと「わかった」という返事をもらいました。私にとって受洗することは、自分の将来にとってとても大切なことと思いい決心しました。（ノンクリスチャンのお父様の決断は凄いですね。）三姉妹の中で私だけが教会へ通いました。大人の礼拝にも参加するようになり、すてきな大人のクリスチャンとの出逢いがたくさんあり、刺激を受け、勉強になりました。

大学卒業後、吉川弘文館に二年間勤めました。歴史学を中心とする人文図書を扱う出版社でした。退職後、小池常隆と結婚しました。

（素敵なカップル！）道隆、佐知子、英佐子の三人の子どもたちに恵まれました。

三〇歳の時、夫婦で信朋塾の管理人をしてほしいと頼まれました。信朋塾は美竹教会の十名ほどの仲間が「組の会」を結成し、与えられた恵みへの感謝の思いから、献金を続けて若者のために造った塾です。小金井の地に岩井要さん設計で、一階に集会室、台所、洗面所など、二階に五人の学生のための個室と

管理人の住居があり、「信仰を継いでくれる若者を育てたい」との願いから、一代目は伊藤丸丸さんご夫妻、二代目は私たち夫婦が住み込みの任に当たりました。

入塾案内を作成し、地方からの学生を受け入れました。学生と一緒に住むというのが任務で、特別な仕事はありませんでしたが、仕事を始めたころ子供たちが一歳、三歳、四歳でとても大変でした。（幼子を三人も抱え、学生の面倒を見るのは大変な仕事。よくがんばりましたね。）

学生たちはとても優秀で尊敬できる人たちでした。水曜日の夜、塾長の伊藤丸丸さんを囲んで勉強会があり、学生、私たち夫婦、「組の会」のメンバーが参加しました。この会に出席することが入塾の条件でした。原則的には男子学生を受け入れることになっていましたが、女性の穂積夏子さんやサワラクさんといったことがありました。穂積さんは子供たちをかわいがつてくれ、その後、フライピンで現地の人たちのために働きました。サワラクさんは日本で学んだ後、タイに帰国し大学で教えています。外国からの留学生も多く、みんなで外国語の勉強をしたこともありました。学生たちは私の言うことをよく聞いてくれましたし、信頼できる若者たちでした。とても楽しく充実した十一年間でした。今でも便りや、農業に従事してお米を送ってくださいる方もいます。信朋塾を出た学生は、よき働きをしています。

また、信朋塾では百人町教会の家庭集会を毎月一回開いていました。長谷川まつ子さんが近所にいらして、家庭集会にお誘いし、百人町教会に来られるきっかけになりました。（PTAの副会長もなさったそうですね。）信朋塾で百人町教会の新年会や俳句大会をしたこともありました。

常隆がアメリカで仕事をする事になり、信朋塾から離れる事になりました。その後、信朋塾は閉じられ、活動の幕を下ろしました。（横須賀馬堀海岸の海の見える小池さん宅を訪問し、佐枝子さんの話をお聞きしました。

・聞き手・コメント 雨宮 道子



信朋塾の塾生と共に

土岐 司（弘前教会会員）

「ろば」二一六号では「白髪になるまで背負っていこう」が心に残りました。それともうのも石垣島の記事があったからです。

私が北海道酪農学園の三年生だった一九六二年に弘前教会青年会が中心になり、全国のキリスト者学生二十数名と共に「石垣島に教会を建てよう」と三月の鹿児島港から海路で二昼夜の船旅をした。

雪深い北海道から常夏の石垣島へ。八重山農村センターに宿泊し、サンゴ礁の大地にツルハシを打ち込むも弾かれる難工事の背に灼熱の太陽が容赦なく注ぎ、メンバーの疲労に拍車をかける日々だった。手に血豆を作り、太陽に焼かれて真っ黒になって掘った土台の岩盤に型枠を入れ、コンクリートを流し込んだ時には同労の仲間達と抱き合って感動の涙を流した。名前を刻み、各自の思い出の品を納めての定礎式は、人生最大の事業を成し遂げたような高揚感に満たされた。そのような若者達に寄せる教会員の皆さんの祈りが私たちを支えた。

大学を卒業して教職につき、永く継続されていた「修学旅行は奈良・京都」への行事を「平和教育の場は、広島・長崎だろう」と若い私は挑んだ。そして、数年後には弘前学院聖愛高等学校は「平和教育」を目指す学校として地元新聞に記事が躍った。また「海邦国体」が開催されて、選手引率で二度渡沖した。

最初に石垣島に赴いた時に立ち寄った沖繩

本島にある「ひめゆりの塔」は石柱のみで寂しい戦跡だった。「摩文仁が丘」は茫茫とした荒れ野であり、足下には錆びた鉄兜が散らばる惨憺たる戦争の跡があり、土埃の舞い上がる未舗装の道は私の中に、石垣島とは異なる「沖繩」として深く痛く刻まれた。

この二つの体験は、後に「沖繩に学べ・平和教育」として弘前学院聖愛高等学校がキリスト教育を実践する学校として確立した一助になったのではないかと思う。私が職を辞してから一六年、今も沖繩が学習の場になっていることを信じた。

青春の熱い信仰を分かち合った阿蘇敏文氏は既に神に召され、石垣島にツルハシを打ち込んだ仲間達も他界した。昔を語り合いながら酒を酌み交わす人もいない。だが、私は余生を生きていない。与えられた命に「余り」はないからだ。教会堂の前にある桜の老木が見事な花を咲かせる季節が間近だが、老木という理由と駐車場確保という名目で老木を切ると決まった。桜の延命には日本一の樹木医がいる弘前で、老木を邪魔にして切り捨てるという殺伐とした生命観、いわば、老いても花を咲かせる生命力を人の手で断つという出来事に、この老木も「余生ではない！」と叫んでいるようで悲しい。

自分の足跡を刻んで残そうとは全く思わない私だが、皆様の研修された石垣島の教会の創世記について書いてみました。

溝部 昂（隠退牧師）

趙容来さんの「韓半島の平和構築はもはや夢ではない」を興味深く読みました。私自身平壤生まれですし、敗戦まではあちらが故郷でした。韓国から嫁してこられた方達、在日の方達、前任地の富士宮教会ではいろんな立場の朝鮮人、韓国人達との交わりがありました。一人の青年は済州島から来られた方と結ばれました。その方々みんな違うのです。それぞれが置かれてきた立場で、考え方、主張が違います。それでも南北一つになるという道しかないのだと考えてきました。困難な道が拓かれますように。

高島 敦子（百人町教会会員）

ろば二一七号の趙容来さんの「韓半島の平和構築はもはや夢ではない」は大変興味深かったし勉強になりました。六・一二米朝会談に対する各国の反応はどちらかと言えば否定的又は白紙でした。私はトランプ大統領のイデオロギーや政策については反論したいことが沢山あります。ただ彼の実行力は（良否は別にして）評価しています。それは彼が政治家というより企業家だからだと思っています。容来さんの文を読んで希望が出てきました。韓国と北朝鮮の歴史的関係も分かっていた、日本がそれをどう迎え入れればよいのかということも考えなくてはと思い始めました。（わが国の首相はどう考えてもこの波に乗ってこないでしょうが）。容来さんが本当によく勉強していられるし説得力のある文章でした。

図書紹介

『亡命者の古書店』

佐藤 優著（新潮文庫）

著者に対する先入観があり、たくさんあるこの方の作品を手取ることはなかった。全くの偶然で表題の本を開いたら引き込まれ止められなかった。こんなに優しい文章を書く方、ひとの気持ちを深く理解する方とは思ひもしなかった。

著者は同志社大学神学科の学生時代から、チェコの神学者フロマートカの研究をライフワークと定め、チェコへの留学を模索する。そして最後に見つけたのが外交官になることだった。この選択もとてもユニークで驚く。外交官試験に合格しロシア語研修のために派遣された英国で、チェコからの亡命者で、社会主義諸国から反体制的な書籍を救出する作業をしている古書店主マストニークと出会う。彼を通して長年探し求めていたフロマートカの著作を何冊も手に入れることができただけでなく、東欧社会に詳しい彼を師として国家、民族、宗教について講義を受け対話を重ねる。著者のつきない知識欲と好奇心から対話は幅広く深いものとなっている。

チェコについて国名くらいしか知らない私にとって「プラハの春」、その基盤となった初代大統領マサリクの思想やチェコ思想史、チェコをはじめとして社会主義国・共産主義国のキリスト教（カトリックとプロテスタントの体制への対応の相違など）、一つの国で

ありながらチェコ人とスロバキア人の違いや民族・国家のことなど具体的に語られ興味を尽きない。チェコの宗教改革者フスについてもたびたび言及されている。初代大統領マサリクの視点での『資本論』解説も興味深い。

フロマートカは、反ナチズムを鮮明にし、また一九六八年のソ連軍のチェコ侵攻に対する激しい抗議など具体的に行動する神学者だ。著者によるとフロマートカは、キリスト教徒にとつてもつとも重要なのは「召命（ミッシン）」であるとし繰り返して強調していると、彼の文章を引用している。『信仰とは「召命を受けた」という強い意識がないと成り立たない。（中略）教会が生まれたのは常に、個人または人々が、逃れることのできない非常に重要な使命のために呼びかけられたという意識に包まれるというところである。』またフロマートカは、召命が個人的なものであるということも強調しているという。

亡命者マストニークのほか著者の交際する人々の多様さにも驚かされる。そうしたさまざまな人との対話が繰り返される本書だが、多くの場合それは食事を伴っている。そして食事の描写は詳しく具体的だ。著者は食べることに非常に熱心だ。本書の解説者北原みのり氏は、それは「佐藤さんが一人の生活者であることから離れていないからだ。」と書いている。だから神学や歴史、政治、社会を語りながらこの本が読みやすく親しみを覚えるのだろうか。

（小池 恵子）

ろばのせなか

戦後七三年目の今夏は連日の猛暑で、天気予報は「命の危険」を訴え、台風と地震は日本各地に大きな被害をもたらした。沖縄では、「日本の政治は愛が無い」と本土に歴史を問いつけた翁長雄志知事が亡くなり、今後が心配。異常な気象や自然の災害も混沌とした社会も何か恐ろしい未来を暗示しているようで、楽観的な私でさえ不安になることが多い。

六月に賈先生と仲間たちと弘前に行き、百人町教会会員の斎藤留美子さんとご夫妻と穂積夏子さん、阿蘇先生の妹の工藤幸子さん、阿蘇先生の教員時代の同僚でろばの読者でもある野呂幸子さんと斎藤さん宅でミニ礼拝を共にし、よき交わりをもつことができた。

今号のろばでは、会員の高島紗綾さんのパートナーの廣澤さんに「私の目線」を書いて頂き、土岐さんからは「白髪になるまで背負っていこう」、高島さん、溝部さんからは「韓半島の平和構築はもはや夢ではない」の感想を寄せて頂き、会員以外の方々からも弘前、石垣島、韓国など遠くにいる仲間たちからも支えられている事を実感した。また、今は亡き木田先生や阿蘇先生、岩井さん、伊藤さんと紙上で再会し、百人町教会の礎を築いて下さったことを改めて思い起こした。信朋塾を支えた小池さんご夫妻の働きを知ることでもできた。賈先生のスイスとイスラエルの旅は、先生の証詞を通して、私たちを聖書の世界へと導いて下さった。

（新谷 照子）